

平成 30 年度「第 2 回仕事と介護の両立ワークショップ」開催報告

親の介護、「俺には他人事」？～人間関係の視点で準備のしかたを考える～

【日時】平成 30 年 11 月 26 日（月）18：00～20：00

【場所】長崎大学文教キャンパス 環境科学部 2 階 A24 講義室

【講師】平山 亮 氏（東京都健康長寿医療センター研究所）

平成 30 年 11 月 26 日（月）文教キャンパスにて、「第 2 回仕事と介護の両立ワークショップ」を開催いたしました。学内外から 29 名の参加がありました。

1. ご挨拶（ダイバーシティ推進センター長 伊東昌子）

最初に伊東センター長より挨拶がありました。平成 27 年から毎年実施してきた「仕事と介護の両立セミナー」では、毎回違った視点から仕事と介護の両立について学んできた。平山先生には、介護の視点から見た男性の特性や、多くの人が持つ男性のあるべき姿の固定観念から男性にとっての生きづらさなど、今回も新たな視点からのお話を聴き、多くのことを学ばせていただきたいと述べられました。

2. 講演（東京都健康長寿医療センター 平山亮氏）

講演では、平山先生より『親の介護、「俺には他人事」？～人間関係の視点で準備のしかたを考える～』と題しお話いただきました。最初に、男性が大人になってからの親との関係についての研究が少ないことに着目し、介護問題より男性問題としての息子介護について研究してきた経緯の説明がありました。

親との同居の場合、家族の誰が主に看ているか（介護）を 15 年推移で表したグラフを示し、義理の娘は減少しているが、娘・息子は上昇している、問題なのは、義理の息子がほぼ「0（ゼロ）」で 15 年間横ばいであることと説明されました。

「介護する息子たち」の現在

息子の妻が看るという「伝統」は浅いが、介護するケースは多い。男性で「自分の親の介護は自分でします」と答える男性に共通する点は、「妻＝専業主婦」である。介護する息子は、未婚ばかりではなく、また、正社員のケースが半数を占めていることも説明されました。結婚している息子の介護について、幅広くみられるのは、妻の意思確認や話し合いが行われていないことであり、夫と妻の立場の違いが大きく影響している。義理の親の介護をめぐるのは、初めから介護者候補に入っている妻と入っていない夫、夫婦は対等な立場で



はないこと。親の介助のために必要な家事・介護する人が生活するために必要な家事は、結婚している夫婦で見ると、女性が担うことはよくあるが、男性が担うことはほとんどないことをあげられました。

夫としての息子介護者が気をつけたいこととして、①義理の親の介護をめぐるジェンダー非対称性（妻の立場が夫とは違うことを意識する）②「頼んでない＝やらなくてよい」とは解釈できないため、妻に対して「しなくていい」と伝え、手伝ってほしい場合は交渉する③親は義理子ではなく実子に看てほしいと思っていることを念頭に考える、と説明されました。既婚の息子介護は夫婦関係の総決算であり、介護が終わり離婚する息子介護夫婦は多いことも述べられました。

男性が親を介護するときに起こりやすいこと

きょうだい関係において、親に介護が必要になったとき、女性の負担感やストレスが最も高くなるのは、男を含むきょうだいである。息子のケアと娘のケアは、考え方から異なること、話さない・話せない男きょうだいにおいて、普段からコミュニケーションをとっている妻がいるからこそ、非常時に足並みがそろいうまくいくこと、男性が親のことについて知っている気になっているのは、妻経由で情報を仕入れているからであると説明されました。

母を見て最も衰えたと感じるのは、家事・家族の世話ができなくなっていくときであると答える人が多いが、要介護に関係なくそもそも家のことをしない（できない）父の衰えを感じる指標にはならないことを説明し、父は生涯要支援状態にあることが多いからであると述べられました。

息子介護において、介護者が母であれば「おさえこめる」と思い、行動に移すため、殺人に繋がる場合があり、対処が遅れ、気付いた時には問題が深刻化していたり、一所懸命な息子が、いつの間にか虐待息子になっているケースが多い。ネグレストや虐待＝だらしがない・普通とは違う息子がしやすいというのは偏見であることを説明し、自分にどんな傾向があるのかを知ることが大事であると述べられました。

相談がうまくできない息子介護者は多いが、希望をもとに可能な選択肢をともに探るための相談をすることが大事であり、そのための手掛かりは、親の希望（どこで・どのように最期まで過ごしたいか）を聞くこと、「親の希望を聞く＝希望を実現させる」ではなく、親の希望を聞いたうえで、自分は何を・どこまでできるのか、具体的に考えることに繋がると説明されました。

ひとりで頑張る・ケアすると、生きられる可能性が低くなるため、頼る先を分割・分散させることが不可欠であり、そうすることで生を安定させることができる（ケア責任を果たす）こと、また、サポートは、何をどこまでしてほしいのか、しなくてよいことは何かを具体的に依頼することが必要であると説明されました。

介護の問題は介護に限った問題ではなく、それまでの関係やいつもの見方・関わり方の延長にある。「いま介護が必要になったら？」とシュミレートしてみることも、介護の事前準備として必要であり、介護はひとりでしない方が責任を果たしやすく考え方を転換することが大事であると締めくくられました。



セミナーの様子

3. おわりに

第2回仕事と介護の両立ワークショップには、多くのみなさまにご参加いただきました。アンケートでは「自分の中の潜在的意識に気付かされた」「男女の見方、考え方の違いがよくわかり、とても面白かった」「具体的かつ様々な角度からのお話でわかりやすく勉強になった」「男女間のコミュニケーションは必要性だと思った」「自分の中で“嫁”という意識が強いことに気付いた。課題から目をそらさないことが重要だと学びました」など、気づきや学び、感想を多くいただきました。アンケートへご協力いただきましたみなさま、ありがとうございました。

長崎大学ダイバーシティ推進センターは、来年度も仕事と介護の両立ワークショップの開催を予定しています。今後ますます介護の課題を抱える人が増加することが確実視されているなか、家族の課題を抱える方や今後課題に直面する可能性のある全ての方々が介護の理解を深められるきっかけとなりますように、仕事と介護の両立支援に取り組んでまいります。